



農業を通じ、緑と地域社会を守る

池田千宏さん 方南和泉地域施設運営協議会・運営委員

プロフィール：1954年、山梨県上野原市生まれ。杉並区下高井戸4丁目在住。
大手印刷会社勤務を経て、杉並区高井戸にて農業、不動産業に従事。
上町親交会副会長、上町睦会若衆頭、消防団など、新世代の地域リーダーとして日夜活動に邁進している。
※杉並区の農業の現状を知るために…「農産物直販マップ」のアドレス
<http://www2.city.suginami.tokyo.jp/library/library.asp?genre=C60>

■農業で緑を守る、 地域社会を守る



▲農作業の池田さん

池田さんは下高井戸4丁目にある自宅の畑(生産緑地)で奥さんと二人、ジャガイモ、サツマイモ、里芋、トマト、キュウリ、ナス、枝豆、カブ、キャベツ、小松菜などの露地もの野菜を栽培している。ハウスを使わない露地物だ。収穫した野菜は、対面販売したり、無人販売でも販売されている。現在、杉並区の農地面積は56.43ヘクタール、区内面積全体(34.02平方キロメートル=3,402ヘクタール)の約1.65%に当たる。23区中では5番目の広さだが、農家数は195戸(2005年4月現在)で、年々減少傾向にあり、大部分は兼業である。「家庭菜園や区民農園で農作業を“楽しむ”人は増えている。でも、農業そのものは…」、池田さんは農業の現状に危機感を抱いているのだ。都市近郊農家には、緑地の保全、オープンスペースの確保、そして災害時の多目的利用と、さまざまな役割が課せられている。

2005年9月4日の集中豪雨で、杉並区は1時間に110mmを超える記録的な大雨に襲われ、床・床下浸水など約2300件という大きな被害を受けた。自分の暮らす地域への強い愛着、地域は自分たちで守ろうという意思がなければ災害を防ぐことはできない。池田

さんは農業を通して、そんなことを考え、実践してきたのだ。

■社会の第一線から、 地域の第一線へ



▲ハッピー姿の池田さん

37歳のとき、池田さんは会社を辞め、家業を継いだ。大手印刷会社の営業マンとしてクライアントとデザインや企画部門とを結びつけるプロデューサー的な立場。競争も激しく責任も重い、中身の濃い、やりがいのある仕事だったと振り返る。家業の農業と不動産管理をこなしながらも、“生きている情報”が入ってこない不安と寂しさを感じる。畑で鎌を持って草取りをしている池田さんの脇を、スーツを着た若いビジネスマンが足早に通過ぎていく。「こんなことをしていてよいのか」、そんな思いにかられるたび、「家を守る、地域を盛り上げることが、今の私の使命だ」と自分に言い聞かせる。ここから出発するしかない。心を決めた池田さんは、家業の農業・不動産業の傍ら、町会などの地縁組織と積極的に関わってゆく。町会のイベントに参加してほしい、消防団で人手が足りない、青年団に入してほしい…地域も働き盛りの池田さんの

活躍に期待していた。まずは町会の上町親交会に参加。町会の活動を通して地域の実状を知ることから始めた。

しかし、サラリーマン時代と違い公私の別がない、日常生活と切り離せない、休みも関係なし。そんな毎日に耐えることができたのは、地場の友人が増えたこと、トラブルがあれば助けてくれる、「心のフォローをしてくれる仲間ができた」からだ。現在、池田さんは上町親交会の副会長を務めている。

また、下高井戸八幡神社の氏子たちの集まりである、青年団の上町睦会では若衆頭も務めている。これは一種の親睦会組織で、町会のイベントへの協力、地場の祭りへの参画などのほか、花見や餅つき大会などのレクリエーション活動で親交を深めるなど地域交流の要的な存在でもある。現在会員数は50名前後。地域の伝統を継続する役割も果たしている。祭りは地元だけではなく、他地域へも出向いてゆく。どの地域も人手不足という共通の問題を抱えているからだ。かつて祭りは地域住民たちの結束力を確認する場、地域への思いを表現する場だった。池田さんは「私たちは“縁の下の力持ち”的な存在」と言うが、その存在がなければ、いまや祭りひとつ行っこともできない時代になっている。



↘

■若い人たちの心を地域につなぐ



▲ライダーの池田さん

池田さんの活動する地域は、下高井戸八幡神社を中心としてまとまりのある地域といえるが、昔気質のところもあるという。池田さんは、自分自身が地域にとけ込むことに苦労した分、若い人たちへの支援を惜しまない。池田さんの目には、いまの地域の若い人たちは孤立しているように映る。小さなグループでしか動けない。上町睦会を地域のコミュニケーションの場として活用することで、若い人たちの地域における現状に風穴を空けたい。下高井戸八幡神社の氏子たちの青年部4町が連合した志祭連合という組織を先輩方が立ち上げた。発足して10年、4町そろってイベントを運営したりする中で地域交流ネットワークを作ってきた。八幡神社のクリーン作戦(大掃除)も初めての試みだったが参加者にも好評だった。この5月には 伊勢神宮・外宮の本殿の建て替えがあり、ご神木を奉納する「曳初(おきびきぞめ)式」に全国から何千人もの参加者があり、池田さんたちも氏子として参加した。「地場で何ができるか、自分たちのまちの中だけで考えては視野が狭くなる。逆に外へ外へと活動を広げてゆくこと」。それが池田さん流の地域貢献のコンセプトである。

一方、家業の農業では、JA東京中央青壮年部の副会長を務めている。ここでも農業に取り組む若い人たちを支援したい池田さん。援護射撃として、地域農業への理解を深めるためにさまざまな活動をしている。たとえば、秋には自分の畑を開放して栗拾いをしてもらう。農業への理解を深めるには現場を見てもらうのが一番、自然に触れる体験をして

もらうことが大切と考えるからだ。「東京で栗拾いができる」と驚かれることも多いという。また、小学校で芋掘り体験、中学校でうどん・蕎麦打ち教室を開くなど次世代への農業教育にも熱が入る。

さらに方南・和泉地域集会施設運営協議会では、総務部長として永福・和泉地域区民センターを拠点に地域の人たちのふれあい場づくりにも関わっている。周辺地域の方々が集まってつくる協議会ができて15年になるが、15周年記念誌いづみ「地域・水・川物語」を発刊した、池田さんがまとめ役の中心となった。センター・ボランティア室に保管されていた大正・昭和時代のアナログ写真をヒントにして地域の特徴を描き出した記念誌だ。

さらにさらに、杉並消防団では、「消防操法大会」の選手として、今年も出場。スピード、安全器具の取り扱い、規律がポイントのこの競技、「50歳を越えるとちょっときつい」と言いながらも、週に1度のソーシャルダンス教室通いだけは絶対に外さない。「忙しさに流されないように。そしてこの年齢になっても何か体に身に付けたいと思った」のがきっかけだそう。踊って汗をかき、ストレスを発散することで、また明日から地域で活動するエネルギーを得ているのだろう。ゆっくり時間がとれたら何がしたいかの問いに、「オートバイでツーリングか、それともスキーに行くか…」。池田さん、あくまで行動的なのだ。

(文：村田静保)